

図14 寝たきり予防活動対象者把握方法

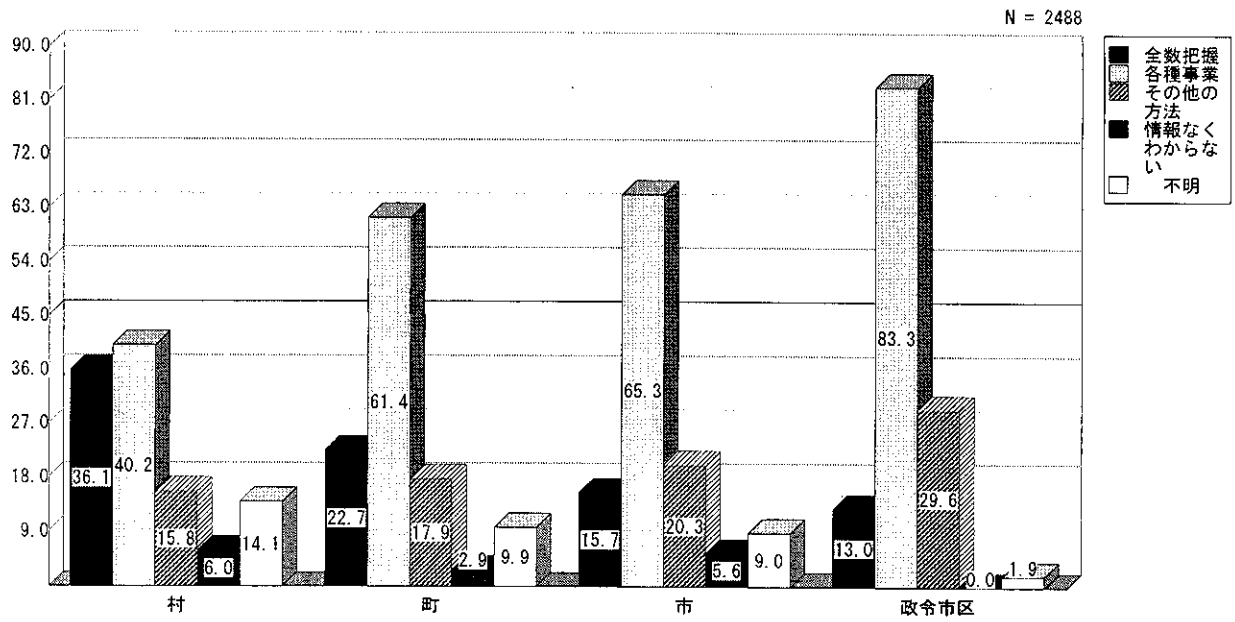


図15 全数把握の方法

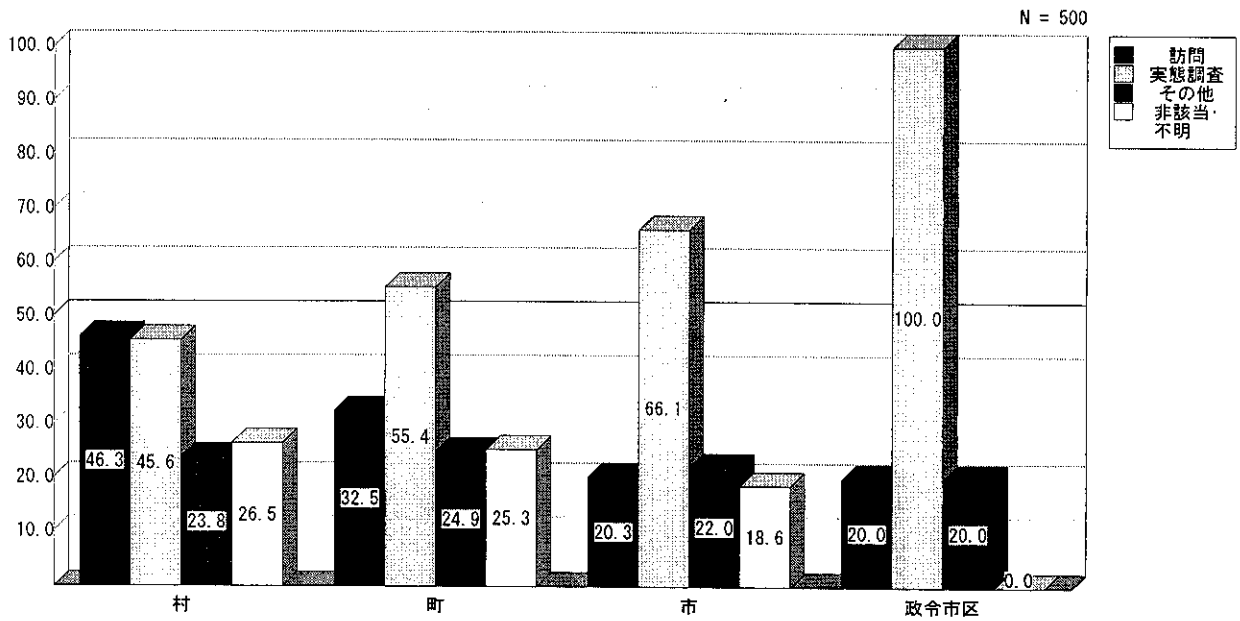


図16 介護保険申請相談の場

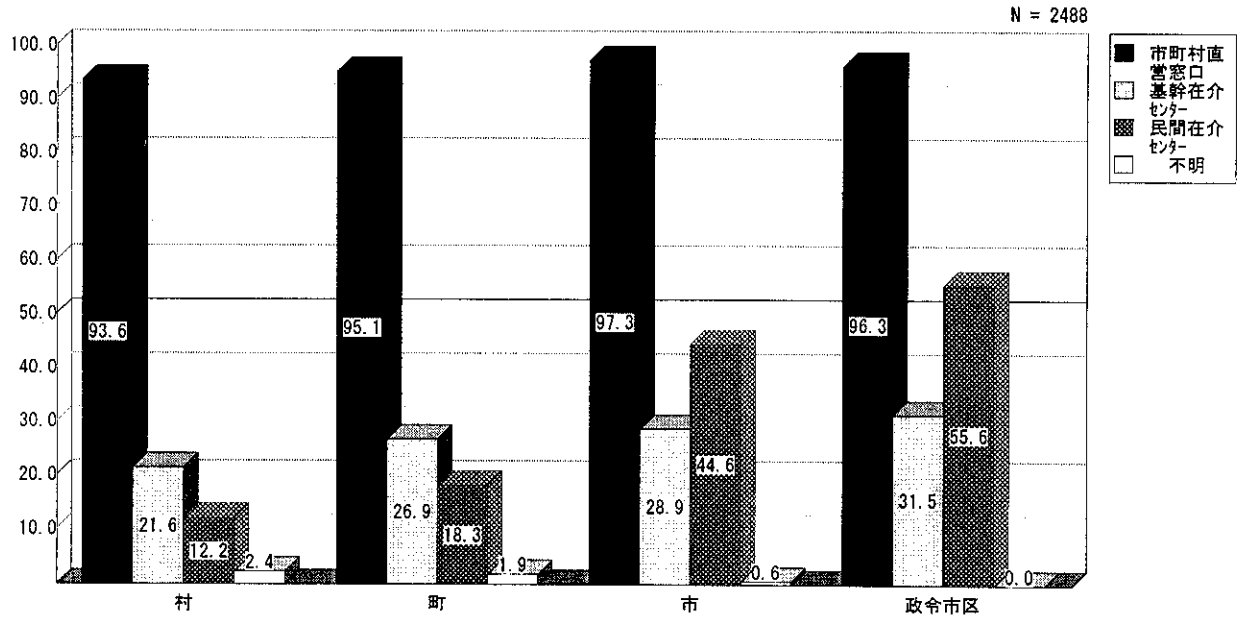


図17 介護保険対象外高齢者の相談の場

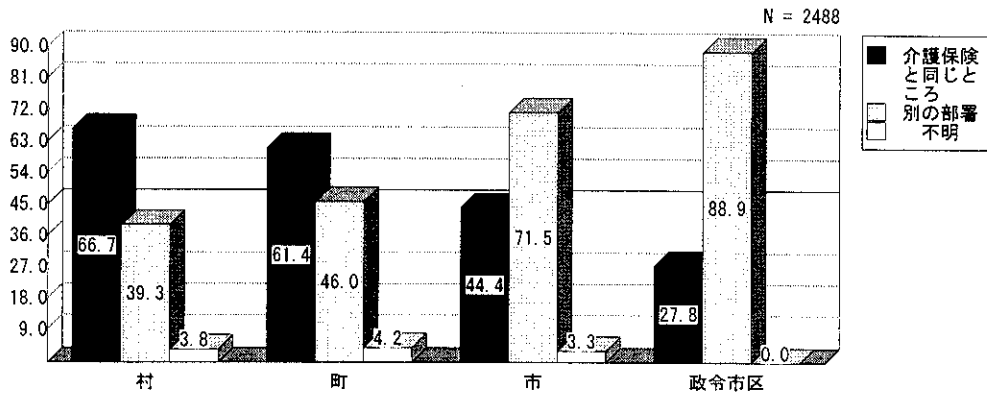


表6 寝たきり・閉じこもり予防活動の実践事例の報告

	合計	調査票2							平均	標準偏差	全報告事例数
		なし	あり(内訳)	1	2	3	4	5以上			
全体	2488	1021	1467	1081	213	103	34	36	1.58	2.09	2318
	100	41	59.0	100.0	73.7	14.5	7.0	2.3	2.5		
村	468	219	249	199	26	17	5	2	1.34	0.81	334
	100	46.8	53.2	100.0	79.9	10.4	6.8	2.0	0.8		
町	1488	612	876	665	131	52	19	9	1.38	0.82	1209
	100	41.1	58.9	100.0	75.9	15.0	5.9	2.2	1.0		
市	478	185	293	200	50	28	7	8	1.59	1.21	466
	100	38.7	61.3	100.0	68.3	17.1	9.6	2.4	2.7		
政令市区	54	5	49	17	6	6	3	17	6.31	9.25	309
	100	9.3	90.7	100.0	34.7	12.2	12.2	6.1	34.7		

## 閉じこもり高齢者の実情及び閉じこもりの出現頻度

佐藤京子、田中久恵、金丸洋子(山梨県立看護大学)

**研究要旨** Y県T市における高齢者保健福祉実態調査の資料から、地域全体に対する寝たきり(介護保険法の対象)、及び介護保険の対象外のいわゆる「閉じこもり高齢者」の出現頻度を推計した。日常生活自立度のB、Cランクは3.7%、Aランク(閉じこもり)は6.5%と推計した。併せてT市における高齢者の生活実態を、閉じこもり予防の視点で検討した。山間部、家族形態で、年齢性別、生活自立度、日常の不自由さに違いがあった。

### A. 研究目的

要介護度の高い高齢者から、日常生活は何とか自立していても、身体的、精神的条件或いは環境条件などによって、何らかの援助が必要な高齢者まで、障害高齢者の分布は連続的であるが、対応策によって、どこで線を引くかは、財源や人的資源などの都合によって決められることが多い。また、高齢者の各介護・自立支援別にどのようなケアニーズがあるかは、体系的、構造的に把握されておらず、また、事業の所管部署間でこれらの知見が共有されていない。そこで今後、閉じこもりや虚弱高齢者に対する有効な支援活動推進の基礎資料とするために、地域の全高齢者を対象にケアニーズの構造を明らかにし、日常生活自立度、介護度別の分布を調査する。

#### (倫理面への配慮)

Y県T市の平成10年度高齢者保健福祉実態調査の結果を、個人情報削除してデータベースで提供を受けたので、住民の個人に関わる情報は入手していない。また、地区別に発生が極少数事例の場合も、地区を統合し個人が特定できないように配慮した。

### B. 研究方法

1. Y県T市において平成10年度に実施した高齢者保健福祉実態調査の結果をデータベースで提供を受け集計解析した。調査票は調査対象により、「一般高齢者用」、「虚弱高齢者(在宅)用」、「寝たき

り高齢者(在宅)用」、「施設入所者用」の4群からなっている。各調査票の調査数、調査方法、抽出率、回収率等は表1のとおりである。

調査項目は4群に共通の項目(地区名、性、年齢、世帯状況、住居、痴呆、民間サービスの利用の意向)と、それぞれの群で固有のケアニーズに従って設定されている項目とがある。

1) 地域全体の出現頻度の算出は以下の方法で行った。①「一般高齢者」は調査結果から抽出率を元に全数を推定し、他の3群の調査結果に加算した。②「虚弱高齢者」及び「寝たきり高齢者」を結合して「虚弱・寝たきり高齢者」とした。③年齢階層は65～74才、75～84才、85才以上の3区分とした。④地域はT市8地区を、交通・商業・文化の中心であり人口の2地区(居住人口28.8%)を「市街地」、山沿いの交通の便の悪い4地区(同、27.9%)を「山間地」、そしてこれらの中間的性格の鉄道、主要道路が通り宅地化が進む2地区(同、43.3%)を「平地」の3に区分した。⑤特に共通項目として知りたい事項である健康度、日常生活自立度については異なったカテゴリーで調査されていることにより、表2のようにカテゴリーを結合調整し、「一般高齢者」、「虚弱・寝たきり高齢者」および「施設入所者」の3群により、介護度・自立度別の頻度を算出した。

2) その他の自立度、介護度に影響を及ぼすと思われる要因分析は、「一般高齢者」について集計、比較検討、解析した。

3. 集計解析は「秀吉 for Windows」((株)社

会情報サービス)を用いた。

## 2. 対象地域の概況

Y県T市は人口 33,944 人(平成 10 年 4 月 1 日現在)、高齢者人口割合は 17.7%、平成 10 年の出生数は 320(出生率 9.43)、死亡数は 258(死亡率 7.60)、面積は 161.58 km<sup>2</sup>(人口密度 210.1 人/km<sup>2</sup>)である。市の周囲を高い山で囲まれ、中央の川が流れ、その流域の平坦な土地に幹線道路、鉄道、市街地、住宅地、工場等が形成されている。

就業者率は 48.1%であり、産業別就業割合は第 1 次産業 2.3%、第 2 次産業 48.8%、第 3 次産業 48.9%(平成 6 年)である。主な産業は繊維・織物業、電子・精密機械、観光産業、林業などである。

平成 11 年度は 9 名の保健婦(うち福祉事務所 1 名、職位のトップは主任)により保健活動が展開されている。

## C. 結果

### 1. T市における高齢者の概況

平成 10 年度高齢者保健福祉実態調査から推定されたT市における高齢者(65 才以上)の概況を表 3 に示す。高齢者の総数は 5,907 人、男 42.6%、女 57.4%であり、年齢分布は総数では 65~74 才が 58.1%、75~84 才が 31.7%、85 才以上が 10.3%である。平成 10 年 4 月 1 日現在の 65 才以上人口 5,966 人についての年齢別・居住地域別性比を図 1 に、地域別性別年齢構成を図 2 に示す。

#### 1) 性別の年齢構成・家族形態・居住地域

本研究により推計された性別年齢構成を図 3 に示す。男性では 85 才以上が 6.5%に対して女性は 13%と 2 倍であり。高齢になるほど女性の割合が高くなる。

家族形態は、65 才未満の子供等と同居とみられる「その他の家族」が 55.1%で最も多く、「高齢夫婦世帯」、「ひとり暮らし」、「その他の高齢世帯」の順であるが、後の 3 を合わせた「高齢者のみ世帯」は 42.5%である(図 4)。性別の家族形態をみると、「1 人暮らし」は男性では 3.1%にたいし

女性は 14.5%と女性に多く、「高齢夫婦世帯」と「その他の高齢世帯」は男性がで多なそ男女の差が大きい。

また、居住地域は高齢者の 32.8%が市街地に、38.4%が平地に、26.9%が山間地に 26.9 に住んでいる(図 5)。性別では男性は平地に住む割合が女性よりも 4.7 ポイント高い。

#### 2) 一般高齢者援護状況と生活の場

この調査の 4 種の調査票から算出した 3 群の構成割合は「一般高齢者」は 89.2%(5,270 人)、「虚弱・寝たきり高齢者」は 8.5%、「施設入所者」は 2.3%である(図 6)。

以下、「一般高齢者」を「一般群」、「虚弱・寝たきり高齢者」を「虚弱・寝たきり群」あるいは「虚弱・寝たきり者」、「施設入所者」を「入所群」あるいは「入所者」とし、これら 3 群については「生活援護状況」と総称する。

##### ①性・年齢と生活援護状況

性比を群毎にみると各群とも女性が多いが、入所群では女性が 3/4 を占め、虚弱・寝たきり群では約 2/3 と援護状態による差が大きい。

また、性年齢別の 3 群の構成割合は男性では一般高齢者 91.8%、虚弱・寝たきり者 6.9%、入所者 1.4%、女性ではそれぞれ 87.3%、9.8%、2.9%であり、女性は入所者と虚弱・寝たきり者で割合が高い(図 6)。特に 85 才以上の女性は入所者の割合が 11.6%と最も高く、最も少ない 65~74 才女性との差は 11.3 ポイント大きい。入所者の割合は 65~74 才女性<同男性<75~84 才男性<同女性<85 才以上男性<同女性の順である。また、虚弱・寝たきり者の割合は 65~74 才男性<同女性で後は入所と同じ順であり、その差は 21.6 ポイントの差がある。

年齢が高くなるほど、また、65~74 才を除いて女性の方が入所者と虚弱・寝たきり者の割合が高い。援護レベルと生活の場により差が大きい。

##### ②家族形態・居住地域

家族形態別の生活援護状況は「1 人暮らし」では虚弱・寝たきり者が 14.4%、入所者が 7.9%であ

り、入所者の割合が最も高い。「高齢夫婦世帯」は入所者は 0.5 %で最も少なく、以下、入所者の比率が高い順に、他の高齢世帯>その他の世帯>高齢夫婦世帯となっている(図7)。虚弱・寝たきり者は1人暮らし>その他の世帯>他の高齢世帯>高齢夫婦世帯の順である。

居住地域別では差は大きくはないが、入所者の割合が多い順に、市街地>山間地>平地となっている。虚弱・寝たきり者は市街地>平地=山間地である。

### 3) 日常生活自立度

高齢者の日常生活自立度を表4、図8、9、10に示す。高齢者の64.1%は「普通生活」であり、「日常生活自立度J(以下「J」、A、B、Cも同様)」すなわち「病気障害があるが日常生活がほぼ自立しひとりで外出する」は23.9%、「A:病気障害があり外出は1人でできない」5.7%、「B:病気障害があり日中もベッド上」2.5%、「C:病気障害がありベッド上要介護」1.2%、『病気や障害はないがベッド上の生活(以下、「ベッド上」)』0.8%となっている。

#### ①生活援護状況

一般群では当然ながら「普通生活」が最も多く、「J」と合わせて9割以上であり、「A」、「ベッド上」、「B」、「C」の順である。虚弱・寝たきり群は「J」が最も多く60.1%、以下「A」、「B」、「C」の順であり、入所群は「B」47.4%で最も多く、「A」、「C」、「J」と続いている。

#### ②性別・年齢別

性別では、女性は男性に比べて「A」「B」「C」が多く、自立度が低い人が多い。これは高齢になるほど女性の比率が高くなることも関連している。

年齢別では「普通生活」の割合は年齢が進むほど少なくなり、84才以上は36.2%、「J」と合わせて約6割が“ほぼ自立”であり、それ以外の4割は何らかの援助が必要である。“ほぼ自立”は65~74才で約8割、75~84才で8.5割である。また「ベッド上」48人のうち85才以上が半数以上を占めている。

### ③家族形態・居住地域

家族形態別では、1人暮らし高齢者は「J」の割合が高く「普通生活」は低い。高齢夫婦世帯は「普通生活」の割合が高い。その他の高齢世帯は「普通生活」が多く「ベッド上」「A」「C」が多い。その他の世帯はT市でもっとも多い世帯形態であるが、「A」が少なく「B」が多い。

居住地域別では、市街地は「普通生活」と「C」が他に比べて少なく、平地は「ベッド上」がやや少ない。

### 4) 閉じこもり高齢者の出現頻度

調査結果から「閉じこもり」の出現頻度を出すには、自立度「A」の5.7%に「ベッド上」の0.8%を加えた6.5%が妥当であろう(表4に「A+ベッド上」として再掲)。「ベッド上」は一般群のみに設けられているが、家庭内での行動を表すものであり加算した。

「閉じこもり」は年齢とともに多くなり、85才以上は約1/4を占める。家族形態別では「その他の高齢世帯」で高く、「高齢夫婦世帯」と「その他の世帯」では低い。男性は女性よりも低い。居住地域では「閉じこもり」の割合は市街地が高く、平地では低い。

### 5) 在宅高齢者の生活状況

一般高齢者中の自立度A、B、Cの高齢者は、多くは家族により援護されていると思われる。高齢者の活動力は加齢の他にもさまざまな生活条件で変化し、自立度も連続的のものである。在宅高齢者のケアニーズをを明らかにするために、「一般高齢者」と「虚弱・寝たきり高齢者」を加えた、在宅高齢者についても算出した(表3に再掲)。在宅高齢者の年齢分布は総数と比較して高齢者の割合が少ない。性比は総数と比較して男性の割合がやや多い。これは入所者に高齢者、女性が多いことも影響している。居住地域別の分布および世帯状況別の分布も総数とほぼ同じである。これらは一般高齢者が総数の約9割を占めていることによる。

在宅高齢者の生活自立度の分布は、「普通生活」(65.6%)と「J」(24.2%)は総数よりも高く「A」(5.2%)、「B」(1.5%)と「C」(0.8%)は低い。「閉じこもりは」346人(5.9%)である。

## 2. 閉じこもりに関連する要因

一般高齢者のデータに基づいて、閉じこもりに関する要因を解析した。既に述べたように、一般群は他の群と比較して後期高齢は少なく、男性の比率が高く、高齢夫婦の割合が高いという結果が出ている。

### 1) 家族形態および仕事

家族形態を年齢性別にみると、かなりの違いがみられ、男の「一人暮らし」、及び「その他の家族形態」(即ち子供家族等と同居)の女で、他の家族構成の高齢者より年齢が高いものが多い(図11)。また、「高齢夫婦のみ世帯」の女は65-74歳台が他より多い。高齢のきょうだい、子供等と同居しているものには、85歳以上の高齢者が平均の2倍に達する(図12)。

家族形態を地域別でみると(図12)、女の一人暮らしは市街地が最も多く、平地、山間地の順である。また、男の一人暮らしは全体で22名であったが、山間地では一人暮らしの割合が他の家族形態より多かった。

仕事の有無と職業についてみると、全体では農林業>自営業>団体職員+会社員の順に多く、仕事なしは56%であった(図13)。年齢性別では男は65歳代は2/3が仕事を持っており、75歳代では半数に、85歳以上でも1/3に仕事がある。女では65歳代の1/3が仕事を持っており、85歳以上では10%に留まっている。地域別では有職者は山間地>平地>市街地の順に多く、山間地、平地で農業、市街地は自営業が多い(図14)。

### 3) 日常生活自立度

年齢・性別では、「大変健康」が65-74歳の男>女>85歳以上の女>75-84歳男>75-84歳女>85歳以上の男の順に多い。また特徴的なのは85歳を

こえると男女とも「特に疾病はないが終日ベッド上」が激増する。また85歳以上の女で「病気障害があるが一人で外出できる」が減り、「一人では外出ができない」者の割合も急増している(図15)。

地域別にみるといずれの地域も男が女より「大変健康」が多く、特に山間地でその傾向が強い。山間地の男は全般的に自立度が高いといえる(図16)。家族形態別では、高齢夫婦のみ世帯が最も自立度が高く、高齢きょうだい、子供と同居世帯が自立度が低い(図17)。

### 4) 日常生活上の不自由さ

日常生活動作について不自由さ(普通にできる、介護必要)を聞いたところ全体では「不自由なことはいずれもない」は85.6%であった。地域別には男女で殆ど差がなく、年齢別に細かくみると、年齢が高くなるほど「不自由なことはない」が減少し、特に85歳を過ぎると65歳代に比べて半減する。特に女性にこの傾向が強い(表5)。

不自由な事の内容は、「何らかの不自由さあり」とした、287人についてその内容をみると(図18)、移動・食事・入浴・整容など日常生活動作では一人で行なうのは困難なものは、85歳以上の女性を除いてあまり大きな差は認められない。これに対していずれの年代の男性も調理・掃除洗濯を不自由としており、女性ではどの年代も買い物も上げている。「バス電車以外出」については、女が男より多く、男は年齢と共に多くなるが、女は年齢間の差はあまりない。

地域別では殆ど差はなく、家族形態別にみると、一人暮らしでは、移動・排泄・整容等日常生活動作、交通機関を利用しての外出に若干不自由さの割合が高いが、買物調理などは他の家族形態より多くはない。一人暮らしは何とか一人でやれるからこそ一人暮らしができているといえる(図19)。

### 5) 生甲斐にしていること

日常生活自立度と生甲斐の関係を見ると(図20)、自立度の高いほど仕事や趣味教養を高めるなど、積極的な活動を上げており、自立度が低いも

のでは特に生甲斐はないと回答していた。

#### 6) 今後したいこと

今後したいことを日常生活自立度との関係で見ると、趣味や教養を高めるが20%程度あるが、いずれの健康レベルとも特にないと回答するものが多く、健康度の低いものでは70%にも達する(図21)。

### D. 考察

#### 1. T市の高齢者の概況

本調査により算出された高齢者総数の5,907人は同時期の高齢者人口の99%にあたり、性別、年齢階層別そして地域別の割合もほぼ同数であった。

施設入所者は後期高齢者、女性、自立度BおよびCの高齢者に多いことは了解できる。入所者と虚弱・寝たきり者も施設入所者に準じている。

#### 2. 日常生活自立度と閉じこもりの出現率

T市における高齢者の日常生活自立度・要介護度の関連でみた結果、閉じこもり状態にあるとみられる高齢者は「病気・障害はないがベッド上生活」0.8%と「介助なしには外出しない」自立度A 5.7%を加えた6.5%が基礎的に存在すると云えよう。

また、自立度B及びCは要介護者として、世帯状況に関わらず、介護保険制度の下での対応が必要である。自立度Jの23.9%の中にも、実質的には閉じこもり状態の高齢者があることは容易に考えられるが、生活の利便性、近隣関係などの居住環境や本人の性格などさまざまな条件についてのさらに詳細な検討が必要である。

以上から、在宅高齢者の閉じこもりの出現率は6.5%が基礎であり、閉じこもり予防活動は後期高齢者、1人暮らし高齢者、高齢者のみの世帯に対して、とくに必要と思われる。

#### 3. 日常生活自立度Jの検討

T市の一般高齢者に対する実態調査で、健康状態として「1.大変健康」、「2.普通に生活」に次いで「3.大した病気や障害はないが日中もベッドの上

にいる」、というカテゴリーが設定されており、全部で7カテゴリーに区分されている。この範疇に入る高齢者は後期高齢者が殆どであるが、閉じこもり予防の観点から、興味深い項目設定として評価できる。本研究で閉じこもりをこの「大した病気や障害はないが日中もベッドの上にいる」と日常生活自立度Aランクを合わせたものとしたが、虚弱、閉じこもりを連続的なものと捉えると、実は、Jランクの中にもベッド上ほどではなくともさしたる病気はないが、家に閉じこもっているものがある。Jの内容について今後検討を重ねていく必要がある。

#### 4. 家族形態からの援助の検討

家族形態による高齢者の生活状況の違いは顕著である。1人暮らし高齢者全体では入所者と虚弱・寝たきり者が多く、普通生活は少なく「J」が多い。この内、一般高齢者では女性は自立度が高く、男性は低い高齢者が多い。1人暮らし高齢者が病気や障害になれば、入院・入所が在宅ケアになり、一般高齢者の割合が減少する。一方、一般高齢者は、介護保険実施前の本調査では公的福祉サービスを受けていない高齢者を対象としているが、1人暮らしで要援護の高齢者の生活はどのように支えられているのであろうか。

高齢夫婦世帯では施設入所者も虚弱・寝たきり者ともに少なく、自立度の高い。一般高齢者の自立度は高く、元気に暮らす夫婦像がうかがえる。しかし、どちらかが病気になった場合の他方は2人分の家事と介護の負担は非常に大きく、家族との同居など家族形態の変更もあり得る。

高齢の親子・同胞等で暮らす「他の高齢世帯」では入所者が多く、虚弱・寝たきりは少ないが、自立度の低く閉じこもりが多い。一般高齢者も自立度は低く、寝たきり・閉じこもり予防活動の必要な世帯である。

子ども等と同居している「その他の世帯」は虚弱・寝たきりは多いが施設入所は少なく、自立度は平均的である。一般高齢者では自立度は高い。比較的安定している世帯である。

#### 4. 閉じこもりに関連した高齢者の生活環境

寝たきり閉じこもり予防の視点で、高齢者の生活環境を、山坂、交通事情、家族形態、生活の不自由さ、仕事等の関係で検討した。本研究の資料としたT市高齢者保健福祉実態調査は、介護保険計画の基礎資料としての性格が強く、閉じこもりに強く関与する要因としての、外出の機会、友人知人の有無、生活意欲、満足度などの情報は得られていない。本資料は多数の質問項目から構成されているので、今後これらを推測できる項目を抽出して、更に詳細な検討を加えたいが、現在までの解析結果から、①閉じこもりになりやすい山間地でも、後期高齢の一人暮らしの男性が生活していること、②健康だから一人暮らしが可能、健康度が落ちれば施設または、子供家族と生活するようになる、③男の後期高齢者の割合は女より低い、健康度からみると80歳まで達する高齢者は元来が健康であることが推測される、④80歳以上まで元気で過ごせる高齢者の要因を検討することが重要であるとの結論を得た。

#### E. 結論

1. Y県T市における高齢者保健福祉実態調査の資料から、地域全体に対する寝たきり（介護保険法の対象）、及び介護保険の対象外のいわゆる「閉じこもり高齢者」の出現頻度を推計した。
2. 日常生活自立度のB、Cランクは3.7%、閉じこもり（「A」+「ベッド上」）は6.5%であった。この生活自立度は身体的活動能力を判定するものであり実際行動自体ではないが、閉じこもり予防活動の基礎数として有効である。
3. 併せてT市における高齢者の生活実態を、閉じこもり予防の視点で検討した。山間部、家族形態で、年齢性別、生活自立度、日常の不自由さに違いがあった。地域における寝たきり・閉じこもり活動について示唆が得られた。
4. 虚弱・寝たきり高齢者および施設入所者につい

ても詳細な分析・検討を行いたい。

#### F. 研究発表

1. 論文発表  
なし
2. 学会発表  
なし

#### G. 知的所有権の取得状況

1. 特許取得  
なし
2. 実用新案登録  
なし
3. その他  
なし

#### H. 参考文献

- 1) 都留市. 都留市老人保健福祉計画介護保険事業計画. 2000
- 2) 都留市. 介護保険事業計画老人保健福祉計画（見直し）のための実態調査分析報告書. 1999
- 3) 世田谷区保健福祉計画担当部. 世田谷区におけるねたきり予防のニーズ把握調査. 一人暮らし高齢者実態調査報告書.1998
- 4) 田中久恵. 1人暮らし高齢者フォローアップ調査. 平成10年度厚生省老人保健事業推進費等補助金 医療費適正化の観点からみた訪問事業のあり方に関する研究報告書. 全国保健センター連合会. 1999.

#### 研究協力者

都留市役所市民部  
天野奥津江、分部照美



表1 T市平成10年度高齢者保健福祉実態調査 調査方法

調査票種別	対象数	対象数	抽出率	調査方法	回収数	回収率	有効回答数
一般高齢者	5,296	2,000	37.76 %	留置・面接法	1,990	99.5 %	1,990
虚弱高齢者（在宅）	414	414	100	面接法	414	100	414
寝たきり高齢者（在宅）	116	116	100	面接法	90	77.6	90
要援護高齢者（施設入所）	140	140	100	留置・面接法	133	95.0	133

調査時の高齢者人口は5,966人

表2 日常生活自立度区分

本調査の区分	一般高齢者	虚弱・寝たきり高齢者	施設入所高齢者
普通生活	大変健康・普通に生活	—	—
ベッド上	病気障害はないが、日中もベッド上	—	—
J	病気障害あるが、外出も一人でできる	J1、J2	J1、J2
A	病気障害があり、外出は一人でできない	A1、A2	A1、A2
B	病気障害があり、日中もベッド上	B1、B2	B1、B2
C	病気障害があり、介護が必要・ベッド上	C1、C2	C1、C2

図1 年齢別・居住地域別性比

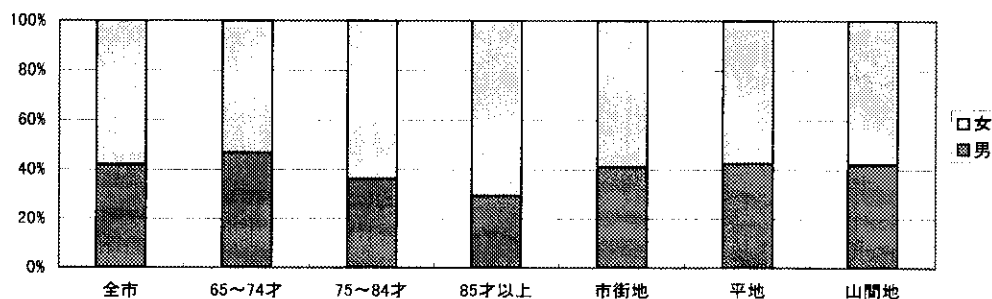


表3 T市における高齢者の概況

T市平成10年度高齢者保健福祉実態調査より

	総数		一般高齢者		虚弱・ねたきり高齢者		要援護施設入所		在宅高齢者(再掲)		
	数	割合	数※	割合	数	割合	数	割合	数	割合	
総数	5907	100	5270	100	504	100	133	100	5774	100	
性別	男	2516	42.6	2309	43.8	173	34.3	34	25.6	2482	43.0
	女	3388	57.4	2958	56.1	331	65.7	99	74.4	3289	57.0
年齢階層	65～74	3430	58.1	3281	62.3	137	27.2	12	9.0	3418	59.2
	75～84	1871	31.7	1589	30.2	221	43.8	61	45.9	1810	31.3
	84才以上	606	10.3	400	7.6	146	29.0	60	45.1	546	9.5
世帯状況	1人暮らし	569	9.6	442	8.4	82	16.3	45	33.8	524	9.1
	高齢夫婦世帯	1769	29.9	1695	32.2	66	13.1	8	6.0	1761	30.5
	他の高齢世帯	180	3.0	162	3.1	8	1.6	10	7.5	170	2.9
	その他の世帯	3254	55.1	2839	53.9	346	68.7	69	51.9	3185	55.2
	不明	135	2.3	132	2.5	2	0.4	1	0.8	134	2.3
地域	市街地	1937	32.8	1689	32.0	190	37.7	58	43.6	1879	32.5
	平地	2268	38.4	2050	38.9	186	36.9	32	24.1	2236	38.7
	山間地	1590	26.9	1419	26.9	128	25.4	43	32.3	1547	26.8
	不明	111	1.9	111	2.1	0	0	0	0	111	1.9

※: 調査結果に抽出率の逆数を乗じて算出した

図2 地区性別年齢構成

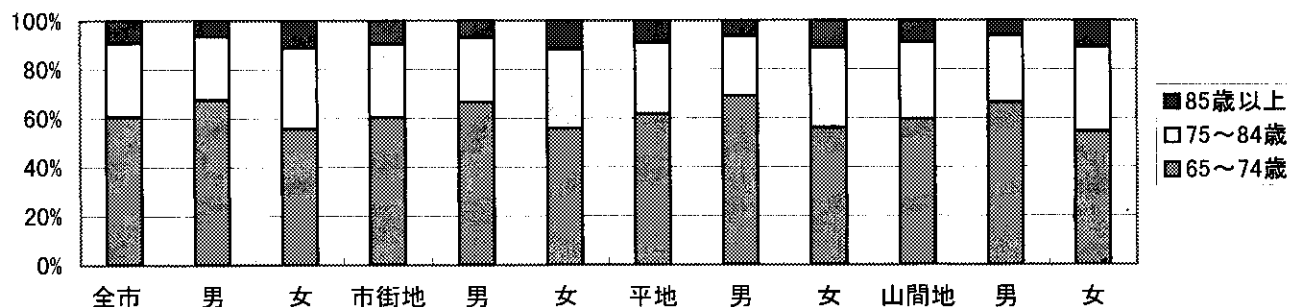


図3 生活援護状況性別年齢階層

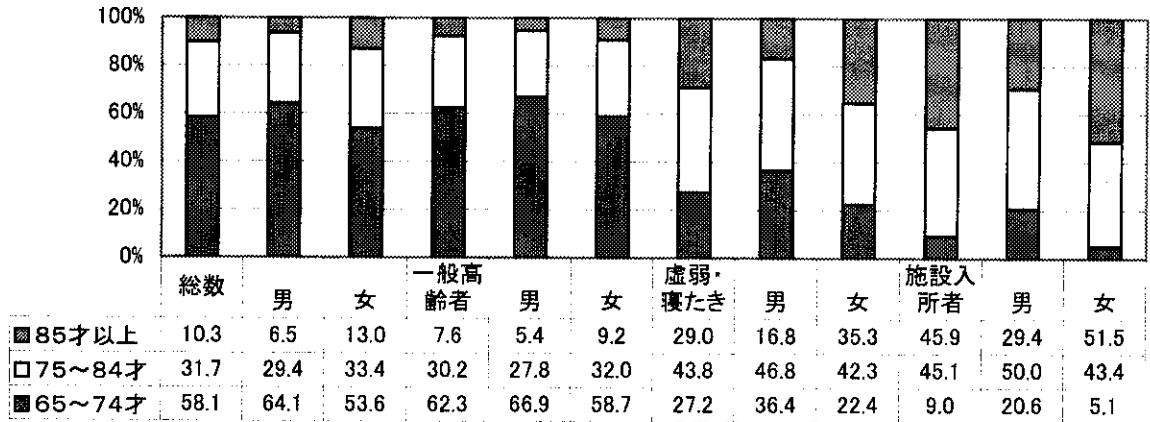


図4 生活援護状況性別家族形態

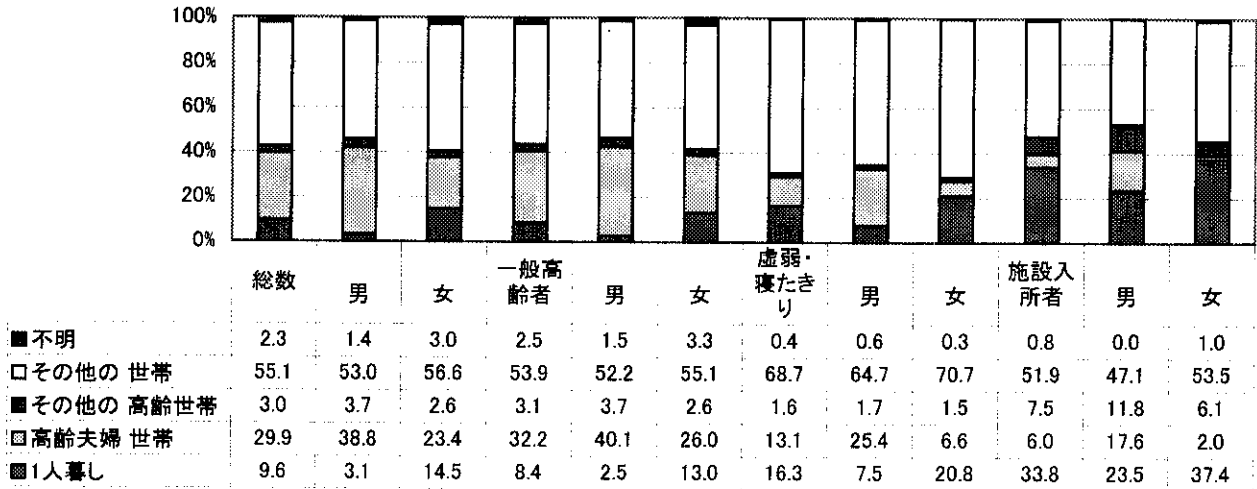


図5 生活援護状況性別居住地区

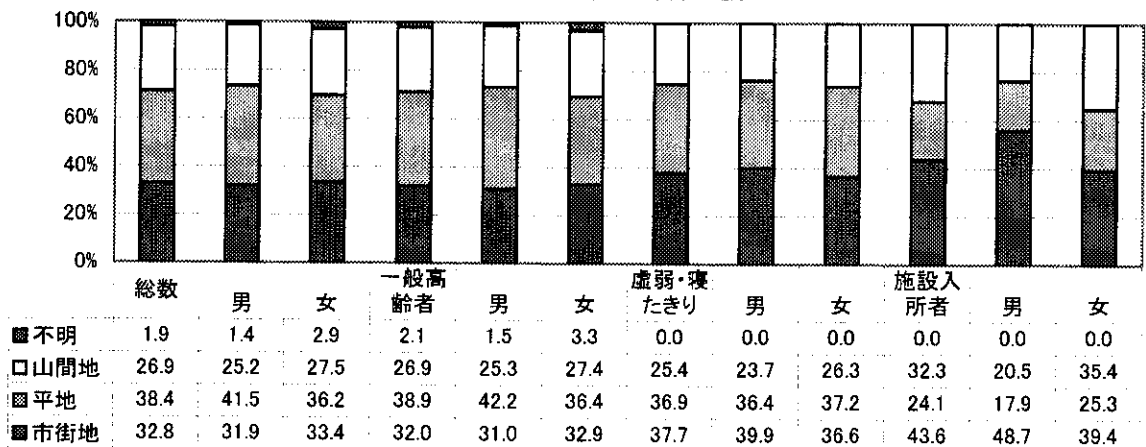


表4 T市における高齢者の生活自立度

下段は構成比率(%)

		総数	普通生活	ベッド上*	J	A	B	C	不明	A++(再掲)
総数		5907	3787	48	1411	335	147	68	111	
		100	64.1%	0.8%	23.9%	5.7%	2.5%	1.2%	1.9%	6.5
性別	男	2516	1705	21	589	98	45	21	37	
		100	67.7	0.8	23.4	3.9	1.8	0.8	1.5	4.7
	女	3388	2081	26	822	235	103	47	74	
		100	61.2	0.8	24.3	6.9	3	1.4	2.2	7.7
年齢	65～74	3430	2563	16	680	80	14	19	58	
		100	74.7	0.5	19.8	2.3	0.4	0.6	1.7	2.8
	75～84	1871	1004	8	588	125	79	23	45	
	100	53.7	1.4	31.4	6.7	4.3	1.2	2.4	8.1	
	85才以上	606	220	24	143	130	55	27	8	
		100	36.2	4	23.6	21.4	9.1	4.5	1.3	24.8
地域	市街地	1937	1207	19	497	133	60	21	-	
		100	62.3	1.0	25.7	6.9	3.1	1.1	-	7.9
	平地	2268	1525	13	531	118	50	29	2	
	100	67.2	0.6	23.4	5.2	2.2	1.3	0.1	5.8	
	山間地	1590	1054	16	382	83	37	18	-	
		100	66.3	1	24	5.2	2.3	1.1	-	6.2
世帯状況	1人暮らし	569	307	5	190	33	17	7	10	
		100	54	0.9	33.4	5.8	3	1.2	1.9	6.7
	高齢夫婦世帯	1769	1268	5	363	64	20	9	40	
		100	71.7	0.3	20.5	3.6	1.1	0.5	2.3	3.9
	他の高齢世帯	180	98	5	47	19	4	7	-	
	100	54.4	2.8	26.1	10.6	2.2	3.9	1.7	13.4	
	その他の世帯	3254	2026	32	779	109	106	49	48	
		100	62.3	1	23.4	3.4	3.3	1.5	1.5	4.4
生活援護 状況	一般高齢者	5270	3787	48	1094	188	26	16	111	
		100	71.9	0.9	20.8	3.6	0.5	0.3	2.1	4.5
	虚弱・寝たきり者	504	-	-	303	110	58	33	-	
	100	-	-	60.1	21.8	11.5	6.5	-	21.8	
	施設入所高齢者	133	-	-	14	37	63	19	-	
		100	-	-	10.5	27.8	47.5	14.3	-	-

\*「ベッド上」は病気障害はないが日中もベッド上の意

図6 年齢階層性別生活援護状況

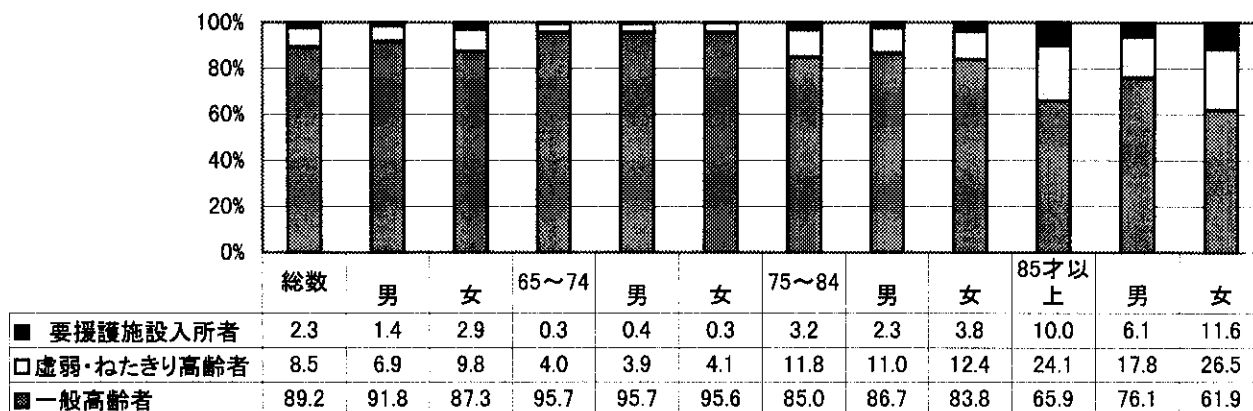


図7 家族形態・居住地区別生活援護状況

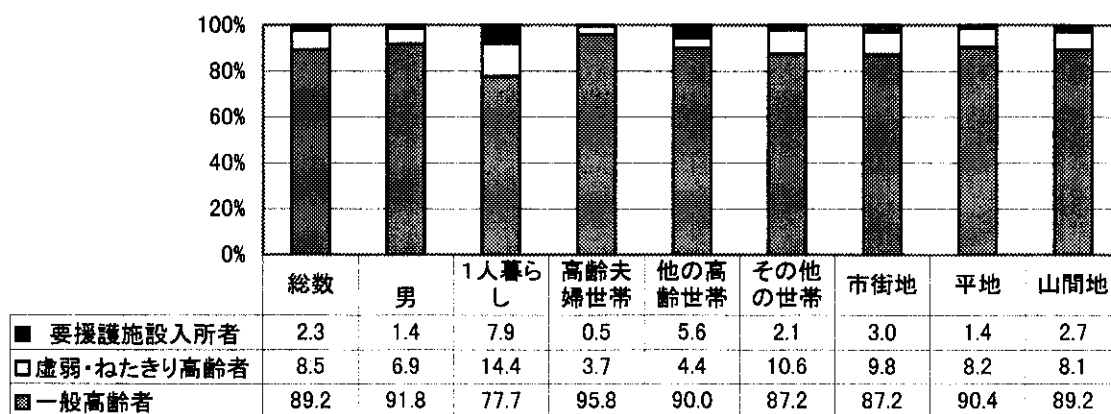


図8 生活自立度(1) 性・年齢・居住地域

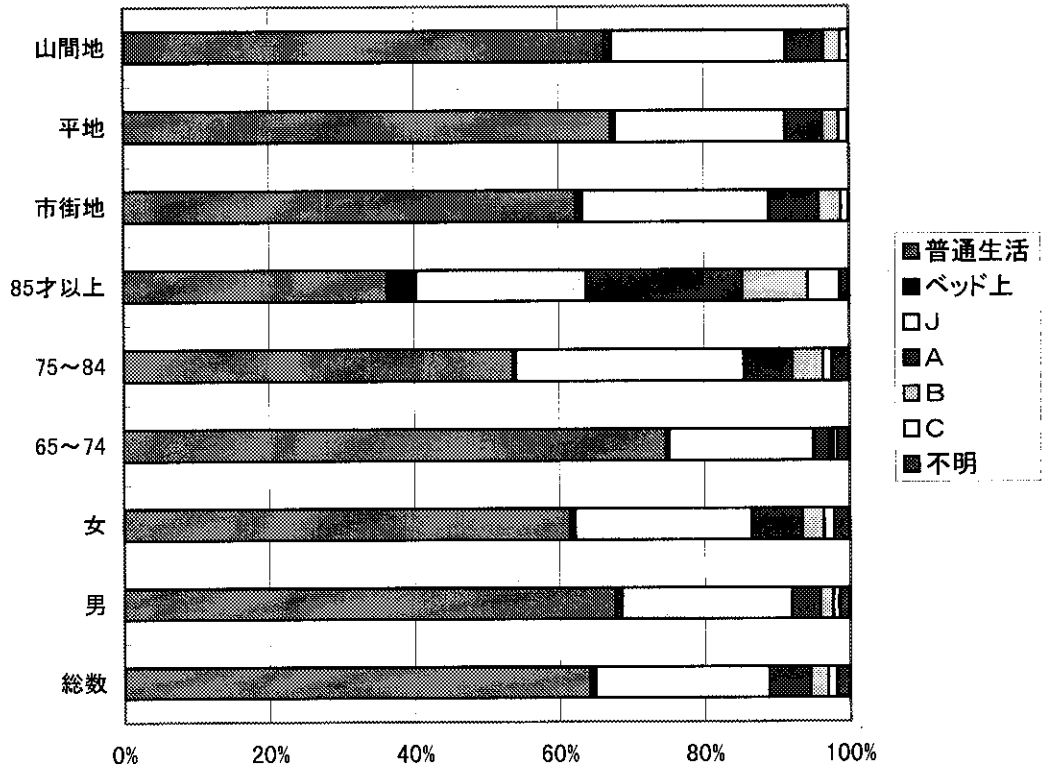


図9 生活自立度(2) 家族形態・援護状況

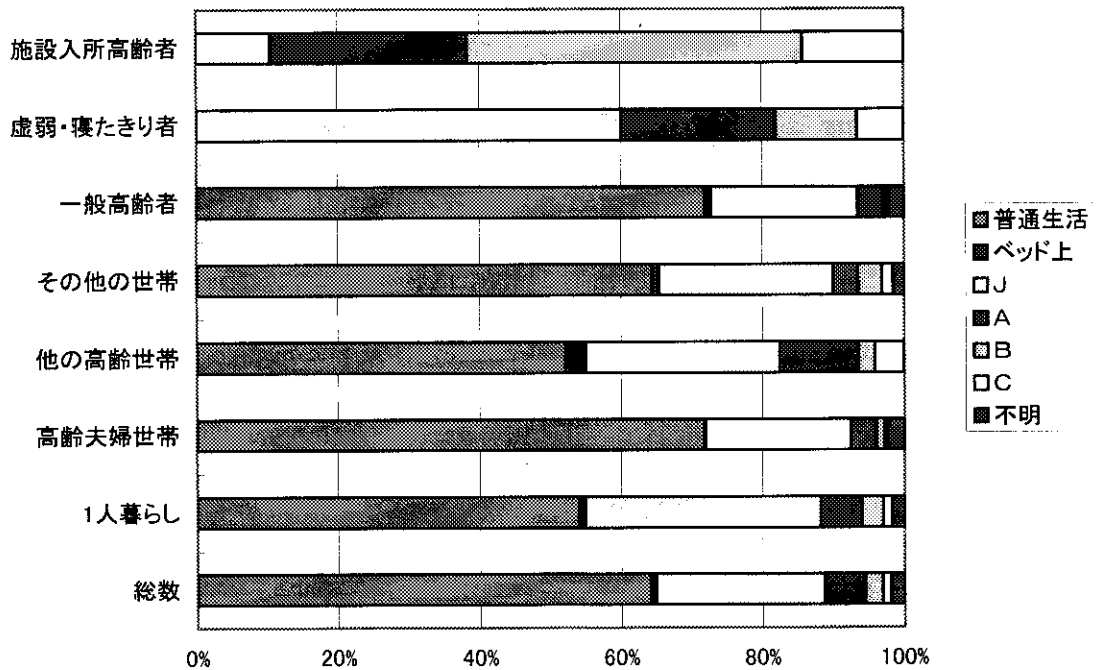


図10 生活自立度別援護状況

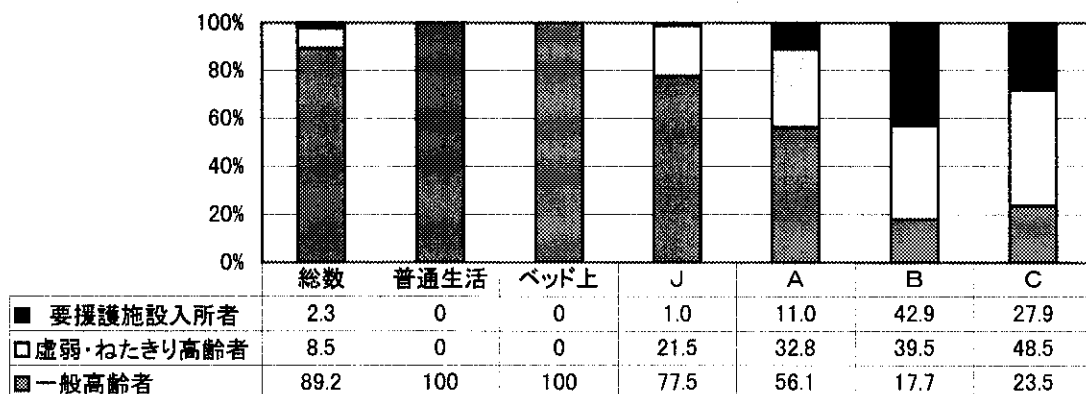


図11 家族形態別性年齢分布

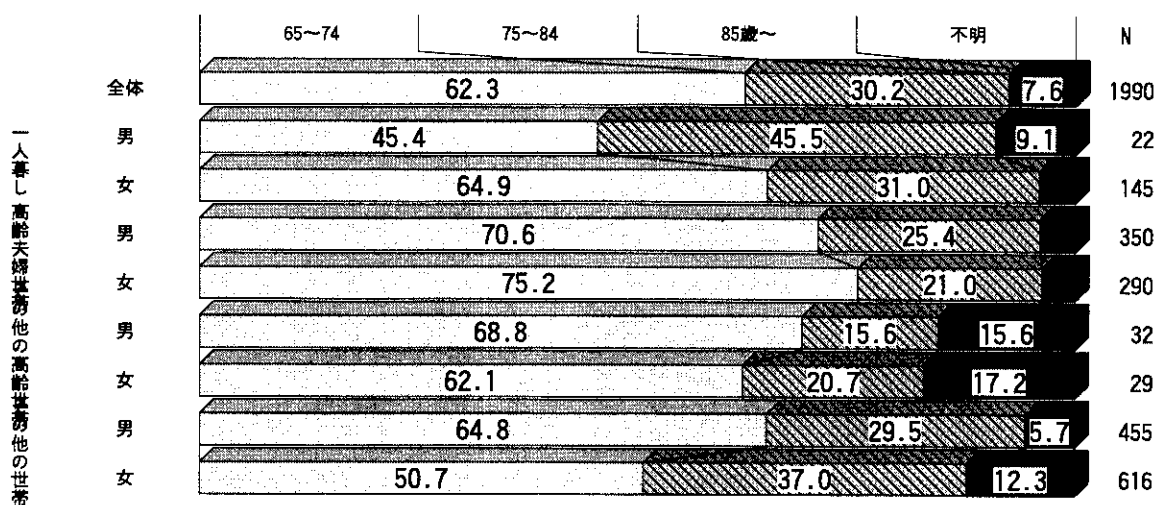


図12 地区別家族形態

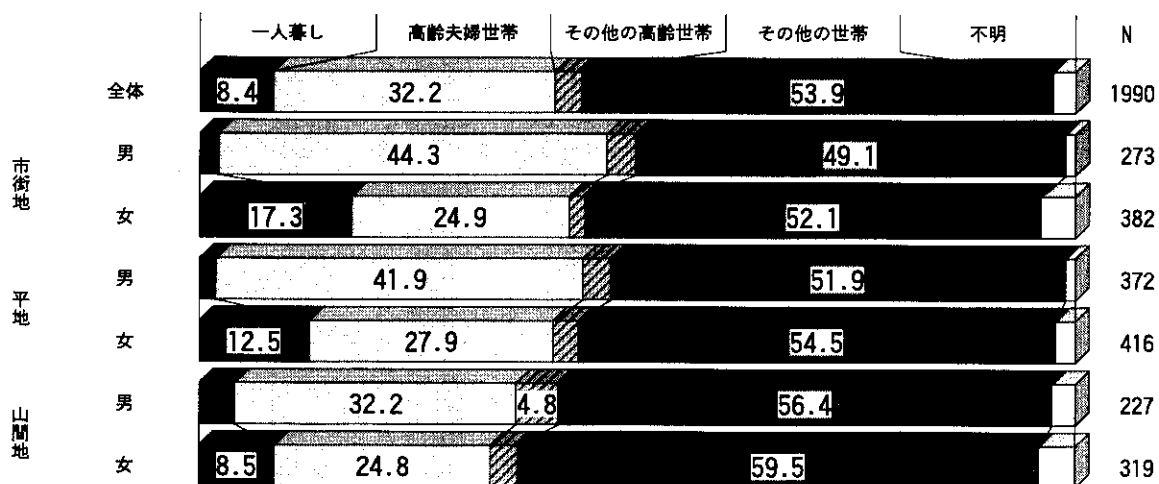


図13 仕事の有無

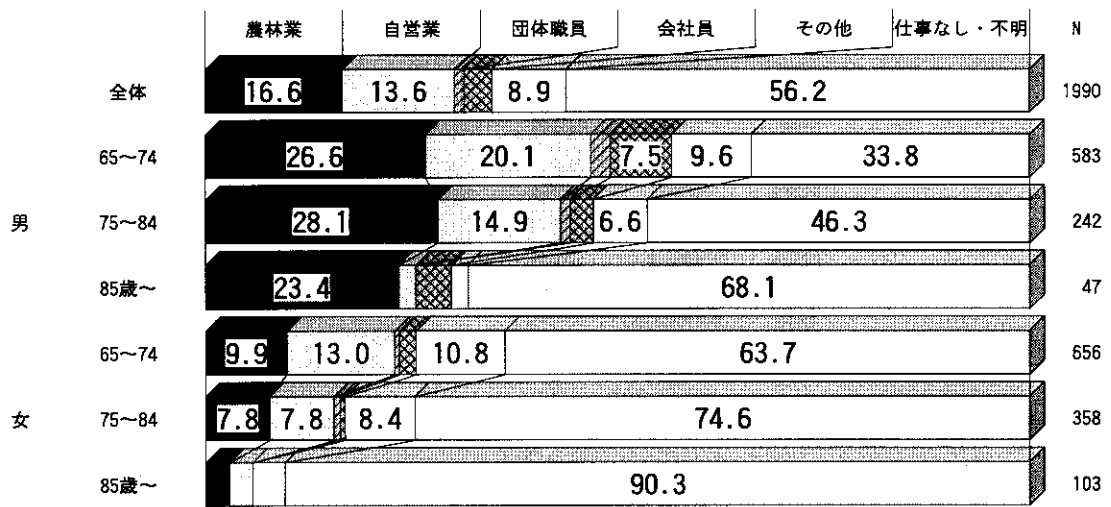


図14 地域別の仕事の有無

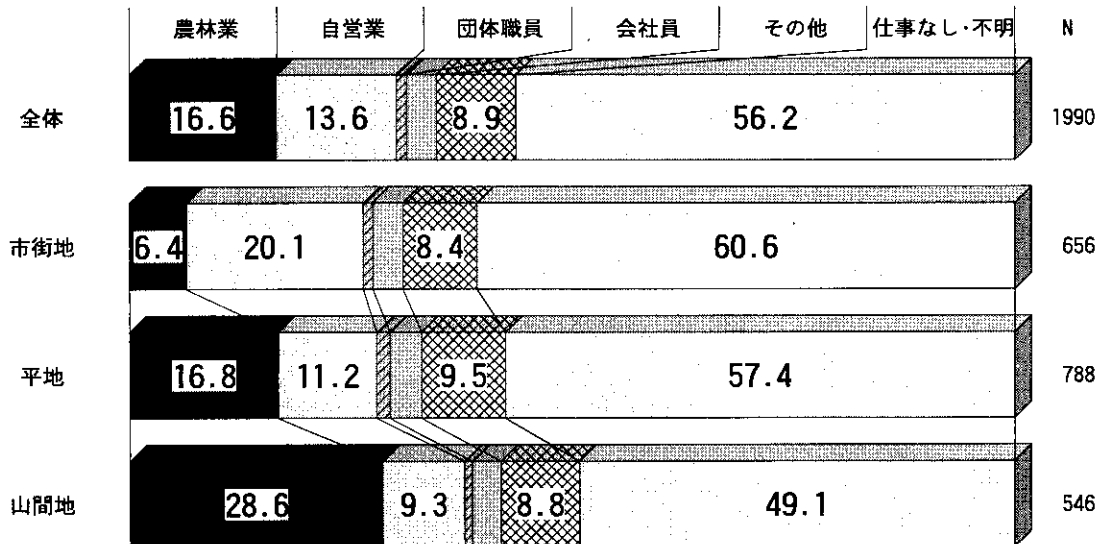




図15 年齢性別日常生活自立度

65~74  
75~84  
85歳

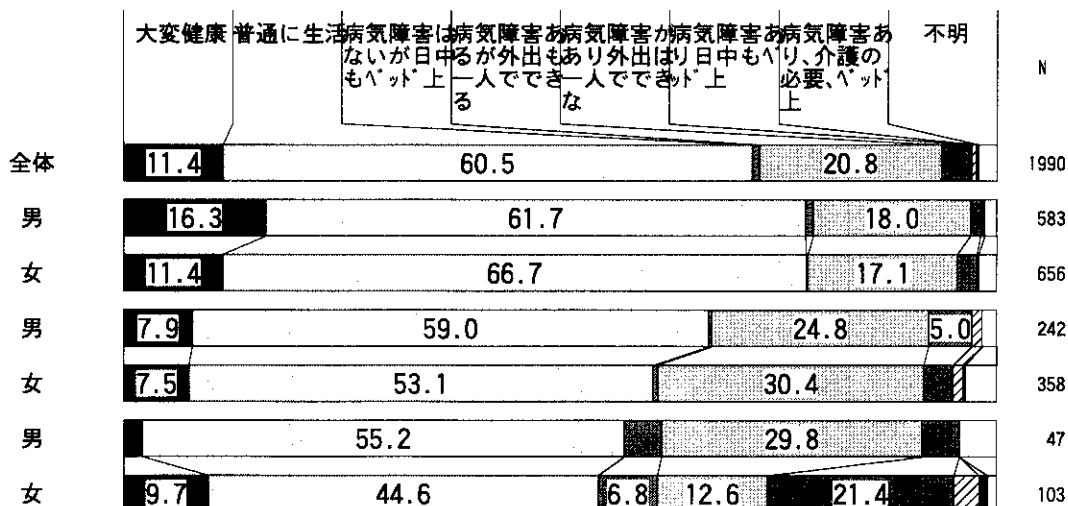


図16 地区別日常生活自立度

市街地  
平地  
山間地

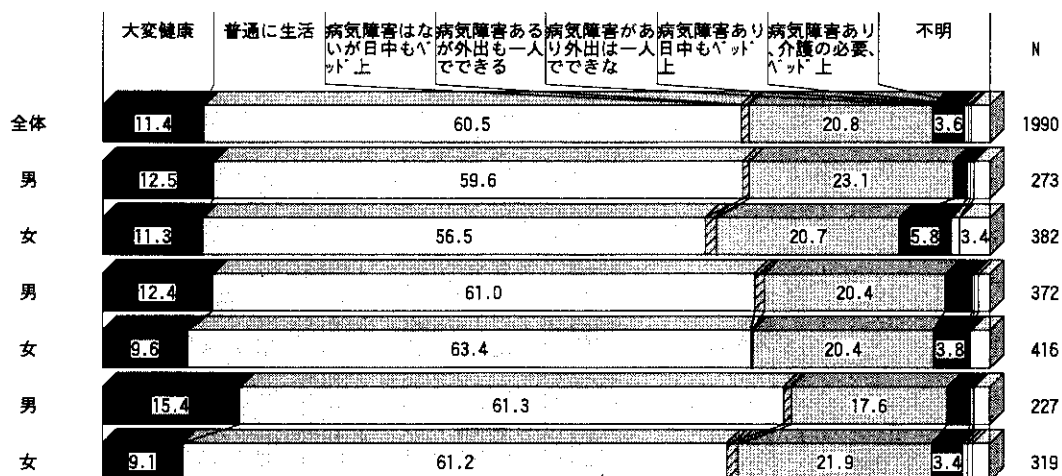


図17 日常生活自立度と家族形態

一人暮らし  
高齢夫婦世帯  
他的高齢世帯  
他の世帯

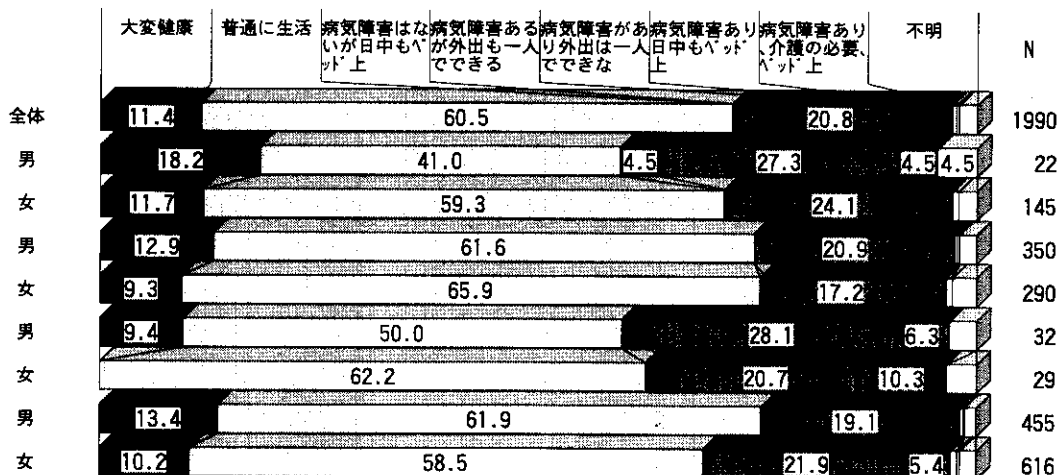


表5

日常生活の不自由さ(1人でできるか)

		性別	合計	不自由なし	割合
全体			1990	1703	85.6
地域別	*市街地		656	560	85.4
		男	273	233	85.3
	女	382	327	85.6	
	*平地		788	677	85.9
		男	372	314	84.4
	女	416	363	87.3	
*山間地		546	466	85.3	
	男	227	193	85.0	
女	319	273	85.6		
年齢別	*65~74		1239	1151	92.9
		男	583	526	90.2
	女	656	625	95.3	
	*75~84		600	490	81.7
		男	242	191	78.9
	女	358	299	83.5	
*85歳~		151	62	41.1	
	男	47	23	48.9	
女	103	39	37.9		

図18 不自由さ(年齢性別)

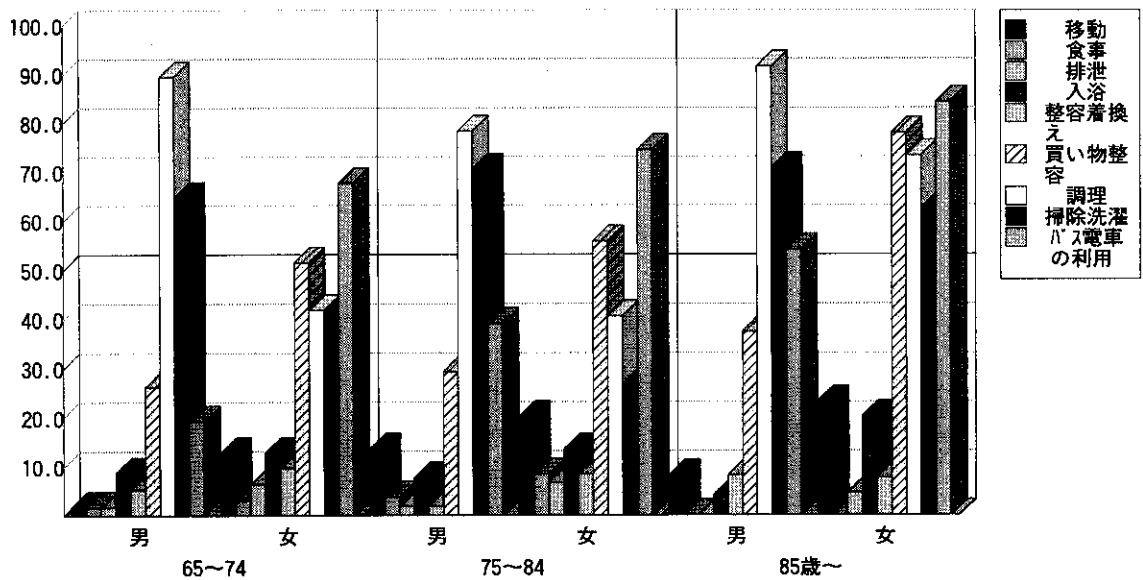


図19 家族形態別の日常生活の不自由さ

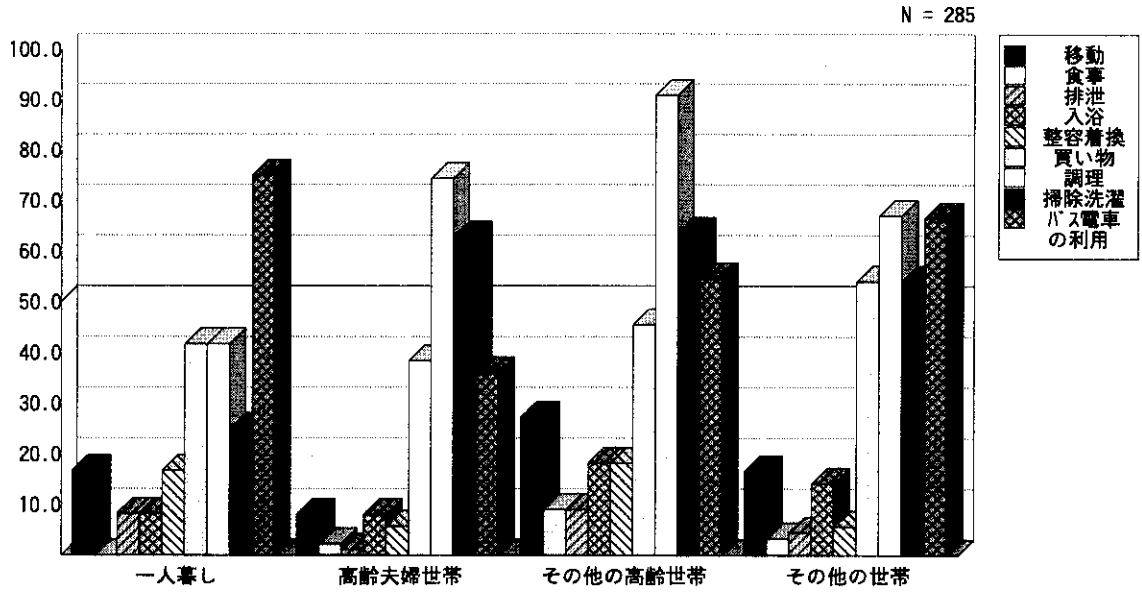


図20 生きがいと日常生活自立度

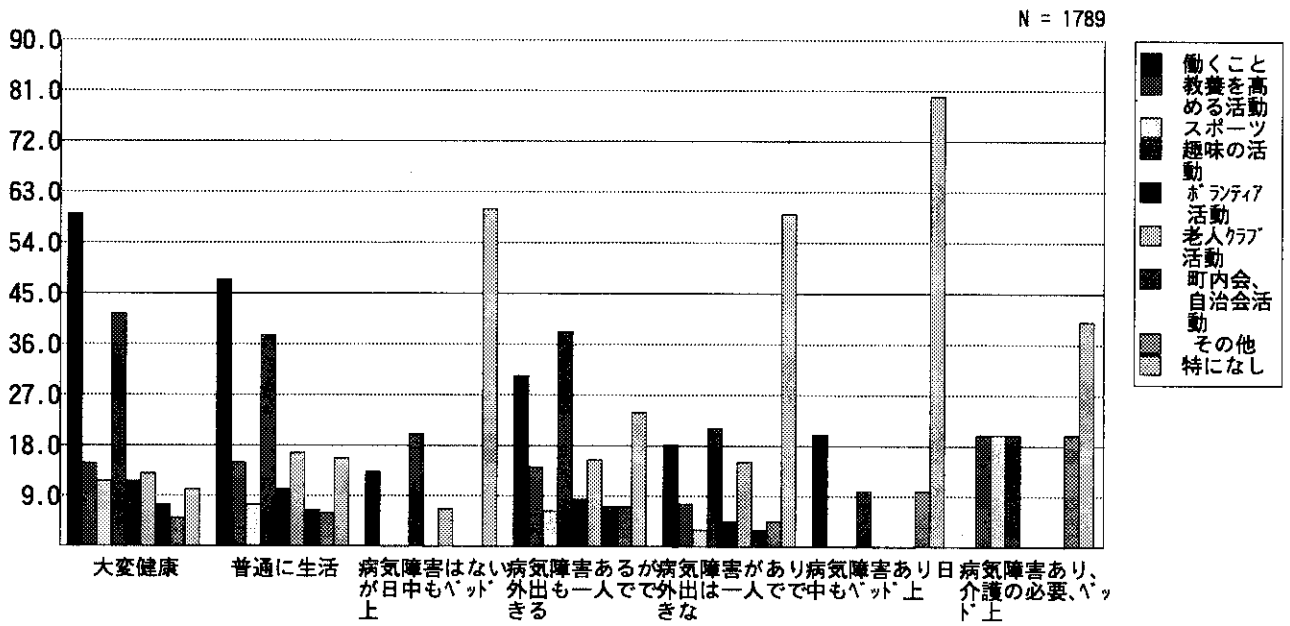


図21 今後したいことと日常生活自立度

